

第1部 DBS 以前

序

これを読まれる方はパーキンソン病の患者、もしくはそのご家族の方と思います。私は昨年、2017年にDBSの手術を受けました。それまでのこと、手術を決断するまでの治療の内容、その後の生活の変化や、「患者目線」で感じたこと・思ったことなどを、記憶をたどって書きたいと思います。「パーキンソン病と言われたけど、この後どんな治療をされるの？」という初心者の方から、手術を考えている方、興味はあるけど怖くて手術に踏み切れない方、いろいろな方の「心のすくみ足」から次の一步を踏み出すための参考になれば幸いです。

1

PD-Life 始めました

患者としてのこれまでの道のりを簡潔に。当方は1970年1月岩手県生まれ。まだビートルズは存在し、ルイ・アームストロングも存命中でした。彼らと同じ時間、同じ空気を共有できたことをうれしく思います。1992年、大学卒業を機に就職のため仙台へ。勤務する仙台市中央卸売市場内の水産物の卸売会社は今年で26年目となりました。

30代前半、いつの頃からか左足を引きずって歩くことを指摘されました。「腰痛からかな？」ぐらいの感覚で近くの

ながら「いいとこ取りにはならない」というのが感想です。両方の癖がそのまま出てくるような・・・でも a+b+c と三つを全て合わせて使うと、bだけで調子が出ないときに良かったりするのですが、また不思議なところでもあります。

ここまでを左半身(右脳)でしました。反対側でもちょっと試しました。やはりbに相当する電極が良い結果になりました。ちなみにbというのは身体の一番外側を刺激するらしく効果のある場所であることは、すでに知られているようです。

こうして今回の調整と入院生活は終わりました。手術から始まる1年間の予定は終了、一区切りつきました。次の入院は電池交換のときで、何年後のことになるか？4年か？5年か？もっと早いのか、あるいは遅いか・・・

このような治療を受ける機会をいただけたことを今更な



が皆様へ感謝します。これからは患者目線で感じたことをフィードバックすることが、治療に参加することと思います。

最後にいつも優しくあった宮城病院のスタッフの皆さん、仲良くなった患者の方々、そしてこんな夫、こんな父の帰る所でいてくれる

三人の家族へ、今までで一番の感謝の気持ちを捧げます。

患者としての「新たな次の10年」が始まりました。